

コロナ禍における都市祭礼のレジリエンス

——長浜曳山祭の再開を事例として



法政大学社会学部教授
武田俊輔

コロナ禍により、全国各地で多くの行事やイベントが中止・休止に追い込まれる中、大規模かつ伝統的な祭礼行事の多くが再開にむけ、舵を切りつつある。祭礼の持つしなやかなレジリエンス（回復力）の背景には、何があるのだろうか。滋賀県長浜の地で四〇〇年以上続くことされる長浜曳山祭を例に、担い手の内部組織や地域社会との関係性、伝承の持つ時間軸に着目しながら考えてみたい。

コロナ禍における祭礼継承の困難／可能性

二〇二〇年以降のコロナ禍の広がりは、全国で多くの祭礼行事の存続の危機をもたらしている。それは以前から地域社会の少子高齢化が進んで後継者の育成が困難になっていた祭礼・行事においても、また観光客等も含めた密をつくり出す大規模な祭礼・祝祭においても同様である。担い手同士や観光客も含む大勢の群集によって発生する密や、他出者が帰郷しての祭礼への参加という形で都市部からの人流が地域社会にもたらすリスクは想像に難くない。また祭礼当日にとどまらず、例えば二密状態での会議や芸能の練習についても感染リスクという困難が伴い、その結果、祭礼を支える日常的な継承の基盤さえ失わ

れてしまう。

加えて担い手の多くが祭礼を行いたいと考えていても、担い手内部でのリスクをめぐる認識のズレ、行政や担い手以外の地域住民からの祭礼実施・参加への否定的な反応、匿名の非難によつて、やむなく中止を決断した事例も少なくなかった。さらに「もし感染の広がりがや、誰かからの非難があつたら」という不安の中で祭礼実施の可否を決定する責任を誰も回避し、なし崩し的に祭礼が中止された事例や、周辺地域の祭礼の中止を見て自分たちも中止を判断するという、「中止下ミノ」と言うべき状況も見られた^{*1}。

このように、二年以上にわたるこのコロナ禍が祭礼の継承活動に大きな困難をもたらしている。しかしその一方で、二〇二〇年になって（東京を除くと）全国的に祭礼の再開が進んでいることも事実なのだ。例えば全国の山車・山鉾・屋台を用いる大規模な祭礼団体が加盟する全国山鉾屋台保存連合会（本部・秩父市）によって行われたコロナ禍における祭礼の実施中止状況に関する調査結果によれば、二〇二〇年には日本を代表する規模の三七の祭礼のすべてが神事を除き中止されたものの、二〇二一年五月にはそのうち二三は内容を変更して（例えば山車の飾り置きにとどめるなど）実施したり、あるいは実施を検討していた。さらに二〇二二年五月の調査では、ほぼすべての団体が実施あるいは実施を検討中である。

このような祭礼の急速な再開の背景には何があるのか。それを理解するためには、単に中止や実施といった表面的な事象だけでなく、担い手内部に培われてきたレジリエンス（回復力）や活動再開に向けたさまざまな模索にまで、目配りする必要がある。例えば感染対策を施しての祭礼の部分的な実施や、外客の来訪を避けるためのオンラインでのライブ配信もそのような再開に向けた模索から生まれた取り組みの一つである。そもそも長い目で見れば、こうした祭礼や行事はこれまで

長浜曳山祭の概要と縮小開催

本稿でとりあげる長浜曳山祭は、滋賀県長浜市において毎年四月一三日～一七日に行われる都市祭礼である。この祭礼は一六世紀末、長浜八幡宮の祭礼として羽柴秀吉が始めた太刀渡りという武者行列に由来を持つと伝承され、一八世紀半ば以降は曳山と呼ばれる山車の上で歌舞伎を演じるという形式が確立して、現在まで引き継がれている。

祭礼は江戸時代の長濱五二カ町に基盤を持つ山組という一三の町内によつて行われる。このうち太刀渡りを担う長刀組を除く一二の山組が四つずつ、それぞれ三年に一度曳山を曳行して、

たけだ・しゅんすけ
法政大学社会学部教授。博士（社会学・東京大学）。専門は社会学。主著に『モモンズとしての都市祭礼―長浜曳山祭の都市社会学』（新曜社、二〇一九年、第五回日本生活学会博士論文賞、第一三回地域社会学賞（個人著書部門）、第四六回藤田賞、『社会の解読力（文化編）―生成する文化への反照』（共編著、新曜社、二〇二三年）ほか。